

学会参加記

第 30 回国際病理アカデミー国際会議に参加して  
The 30<sup>th</sup> Congress of the International Academy of Pathology

塚 本 哲  
Tetsu TSUKAMOTO

東京医科大学八王子医療センター病理診断部

2014 年 10 月 5 日から 10 日までタイのバンコク市センタラグラウンドアットセントラルワールド Centara grand at central world にあるバンコクコンベンションセンターで開催された第 30 回国際病理アカデミー国際会議に参加しました。この会場はタイ市の中心街にある巨大ショッピング複合施設のセントラルワールド内にあるホテルです。

国際病理アカデミー International Academy of Pathology, IAP は 1906 年に始まり、2006 年に発祥の地であるカナダのモントリオールで開かれた第 26 回国際会議では盛大に 100 周年記念式典が行われました。歴代会長にはワルチン腫瘍の Warthin、アショフ体の Aschoff、ユーイング肉腫の Ewing、マロリー染色の Mallory などが名を連ねています。病理医は国際的にも人数が少ないので、国際学会といっても比較的に小さい学会であり、またヨーロッパ支部 European Society of Pathology, ESP など、各地に支部はありますが、国際的な病理学会は事実上 IAP 一つだけと言って良いでしょう。

国際病理アカデミー国際会議は 2 年毎の秋に開かれ、わたしは 1996 年のハンガリーの学会から毎回演題を出して参加し、今回で 10 回目となりました。次回は来年にドイツのケルン、3 年後はヨルダンで開催予定です。ここ 3 回はブラジル、南アフリカ、タイと、やや不安定な国における開催が続き、ヨルダンでの開催も若干の不安が残るところです。国際会議には北朝鮮など一部の国を除く殆どの国からの参加があります。本学からは人体病理学講座の長尾主任教授が頭頸部病理のシンポジウム「唾液腺病理

における新たな進歩」の座長で参加されました。日本からは書面上では長尾先生と私を含めて 76 名が登録してありましたが、実際に参加されていた日本人の先生方は半数くらいと思います。

私は国際病理アカデミー国際会議に行き始めた頃は必ず口演発表をしていましたが、この頃は一般演題はポスターのみとなり、口演発表ができなくなりました。また、今回はポスター発表の演題の一部のみを会場のパソコンで閲覧するという試みがなされ、主催者はペーパーレス化と自慢していましたが、わざわざ一演題ずつパソコンで開いて見る人も少なく、ポスター（？）会場は閑散としていました。閲覧する人であっても数演題を読むのみでしょう。これは発表者の多くに不評で、今回限りにしていただきたい点でした。私もモントリオールの学会で提示したポスターが呼吸器病理のアトラスを編纂していたマサチューセッツ医科大学の先生の目にとまり、肺の良性腫瘍の一章を執筆しました。多くの発表を一覧できることがポスター発表の良い点です。ポスターセッションのペーパーレス化はいただけません。また、国際病理アカデミー国際会議では一般演題の他は workshop、short course、long course、slide seminar など有料のものが殆どで、予約し、支払い済みであるもの以外は参加できず、ポスター展示も今回はこのような状態でしたので、少し不自由を感じました。

私の今回の演題は八王子医療センターで経験した、腋窩リンパ節に転移した原発不明の退形成性髄膜腫の症例を精査した所見を発表しました。様々な



国の病理医に意見を頂きたかったのですが、前述の理由で、意見を頂けず残念でした。発表にあたっては、標本の酵素抗体染色等、病理診断科の技師および病理医の多くの協力を頂きました。

病理学は医学の殆ど全ての分野に関わっているために非常に広い範囲を扱いますが、分子標的薬の受容体検査、神経内分泌腫瘍の概念、造血器腫瘍と悪性リンパ腫の分類、途上国における病理診断の普及、遠隔病理診断など、新しい診断法、疾患概念の変遷、細胞診の進歩に則したテーマが数多く組まれていました。

昨年のタイは政情不安定とされていましたが、バンコク市内は平和で、特に日本人はタイ人には印象が良いようで、良い時が過ごせました。学会主催の

ツアーで象に乗ったり、虎を飼っている寺で虎に触れたり（これも修行の一つだそうです）、貴重な経験をすることができました。タイは王国で現在の国王はプミポン国王という王で、町の随所に国王夫妻の絵が描かれており、また民衆からも大変に慕われています。

国際病理アカデミー国際会議は全世界の病理医が参加する唯一の会議であり、非常に意義の大きいものですので、今後も発表を続けたいと思います。

今回の参加にあたりまして、本学国外出張補助金を頂きました。また、私の学会参加中の仕事をしてくださった教室員の方々にもあわせて深謝致します。